

計量と考古学

もう十五年ほど前になるが、ある雑誌に「はかりを忘れた考古学」について、ぼやいたことがある。その頃の考古学の報告書では、石器や土器など、極めて詳細なスケッチ図を付してはいても、重量を載せている例など見かけなかったし、青銅器や鉄系遺物でさえも、重量の記載はまれだったからである。そのため、弥生時代や古墳時代の金属器の出土重量を取りまとめようとしても、極めて精度の劣る値しか得られなかった。

そもそも、当時の公的な『発掘調査の手びき』には「発掘調査用具資材」として、約四十項目も挙げている中に「はかり」が入っていなかったのである。はかりを忘れた考古学界であった。

そんな状況は、最近になって多少改善されているが、それでも石器や土器の重量を載せた報告書などにお目にかかることはない。

その一方で、考古学でも先端的な計量技術の活用は急速に進展している。例えば、遺物の形状測定に関しては、レーザー計測がかなり進み、間もなく職人的な詳細スケッチ図にとって変わる勢いである。また、レーザー測定では遺物などばかりでなく、巨大な箸墓古墳などの立体的な測量にも威力を発揮しており、筆者も「古韓尺研究」で恩恵に浴している。

しかし先端的な計量技術の活用には落とし穴もある。例えば、国立歴史民族博物館が十年前に炭素十四年代法を利用して世間を驚かせた「弥生時代五百年遡上論」などである。

炭素十四年代法というのは、放射性元素の炭素十四の半減期を利用して、樹木などが生成(光合成)されてから、どの程度経過しているかを測る科学的な測定である。したがって、前提条件さえ満たせば、正しい結果を得る手法であるが、「はかり」という最も基礎的な計量さえ、ないがしろにしてきた考古学界である。

過去の学説に合わない「科学的な測定」など無視しようとするグループと、「年代遡上論」を背景にして「科学的な測定」を盲目的に信じようとするグループとが、激しく論争してきたのはご承知の通りである。

その中で、放射線物理を専攻し、なおかつ考古学にも実績を持つ筆者は、科学的な炭素十四年代であっても、原理的に著しく古い年代を示す場合があることを、理論的に、かつ実証的に主張し続けてきた。要点は次の通りである。

- ① 炭素十四年代は、日本のように海洋国で低緯度の国では、かならず古くである。海の中の炭素十四年代が五百年から千年も古いからである。
- ② 同様に、海風をうける弥生最古の海岸遺跡では必ず古くである。
- ③ 歴博の測定した土器付着炭化物は土中の腐植酸などの汚染によって必ず古くである。
- ④ 以上、総合的に見ると弥生時代の遡上は五百年ではなく二百五十年以下である。

今年論争開始からちょうど十年である。考古学的な面からの総括を概観すると、多様な意見があったが、その平均的な遡上巾は筆者の見解と同じく二百五十年ほどで

あるが、理化学的な面からの総括については、当事者の歴博を除くと私以外には適任者が居ないようである。そのため筆者の数多くの論考を要約して昨年末『季刊邪馬台国』にその「総括論文」を載せた。

そんなこともあってか、このところ、考古学界から筆者の「年代論」についての講演要請が相次いでいる。考古学がもっと計量と向き合う機会になればと願っている。

(前韓国国立慶尚大学招聘教授、元日本金属工業常務、金属考古学、計量史)